



今回紹介する「語り部」さんは小松雅子さんです。

小松さんの父・義久さんは、イタイタイ病対策協議会の初代会長として、患者救済や裁判勝訴に尽力されました。小松さんには、父・義久さんの足跡を振り返りつつ、被害者団体会長の娘としてイタイタイ病と向き合ってきた自身の体験をお父さんとの思い出を交えながら語っていただいています。

『父の想いを胸に』 小松雅子 さん(59歳)



父の活動の原点は、母や祖母の病状を間近に見た経験であり、多くの悲惨な患者さんを救済したいという強い信念のもと、イタイタイ病と闘い続けた人生でした。会長を退いてからも、患者さんの認定問題・汚染田の復元・公害防止対策へと奔走していました。父は、公害の歴史を後世に伝えるため公設の資料館の建設を県に繰り返し要望し、ようやく活動が実った矢先の平成22年2月、資料館建設を目前に人生を閉じました。

石井県知事が清流会館を視察された日の父の笑顔や資料館整備を目指す知事の記者会見を見て、「長年の夢が叶った」と幾度も嘸みしめるように言った父の言葉が、今でも甦り胸が熱くなります。

提訴した頃の父は、患者救済・住民運動に県内外を毎日駆け巡っていました。「裁判に負けたらこの土地には住めない」と覚悟しての闘いでした。

この頃から我が家には、二十数年に渡り、昼夜を問わず脅迫電話や無言電話の嫌がらせが続きました。そのような中であっても、今後の運動方針について、ただじっと下を向いて考え事をしていた父の姿を今でも思い起こします。そして患者さんが亡くなられた時は、真夜中であろうと厳寒の雪深い真冬であろうとも、出かけて行き、患者さんに寄り添う父でした。

また、第二審判決以後の父は、公害根絶を願いながら、東京・新潟・四日市など各地の活動に時間をいとわず出向いていました。

晩年父は、「公害は環境問題の原点」であり、「真実を真実として語り継いで欲しい」と言葉を残しました。この言葉の重さを感じながら、患者さんの想い・克服までの道をしっかり見つけ、どう未来につなげるか、私自身日々問われているものと考えます。

そばにいたからこそ感じる父の想いを受け継いでいくことが私の使命であり、父の想いを胸に、今後も語り部の活動に傾注していきたいと思っています。

語り部講話の感想

イタイタイ病の苦しさがよくわかりました。この公書を二度と繰り返さないように自分たちができることをやっていきたいです。

(中学生 女子)

イタイタイ病は、これからも人へと受け継ぎ、全ての環境問題に向き合っていくことが必要だと思いました。

(中学生 男子)

生々しい悲惨さが伝わってきました。被害者の苦労を無駄にしないためにも二度とこのような問題を繰り返してはならないと思いました。

(20歳代 大学生 女性)

イタイタイ病について深く理解できました。

小松さんの父の患者救済に向けた努力の日々、大変だったろうと思います。でもその努力が今につながっているのだと思います。

(60歳代 女性)

語り部講話の聴講ができます。

対象は10名以上の団体で、事前申込が必要です。

詳しくは資料館へお問い合わせ下さい。なお、席に余裕がある場合は個人の方も同席のうえ、聴講できます。

